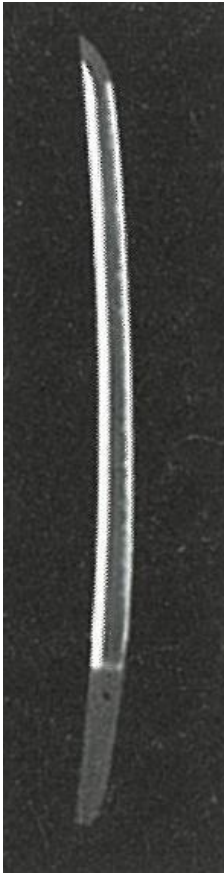


わきざし すいしんしまさひでめい
脇差（水心子正秀銘）

市指定有形文化財（工芸品）

写真は、赤湯地区の烏帽子山八幡宮に伝わる、江戸時代の名刀工「水心子正秀」が作った脇差です。この脇差は長さ 51cm で、銘（※1）として「正英・水心子正秀」の花押（※2）が刻まれています。文政 2（1819）年 2 月、水心子が 70 歳の時の作品です。もとは赤湯北町地区の外山家にあった大小 2 刀のうちの小刀で、大刀は終戦直後、アメリカ駐留軍に引き渡されてしまいました。

水心子は、寛永 3（1750）年に元中山諏訪原地区に生まれ、父を早くに亡くしたため、母と赤湯北町地区の外山家に身を寄せました。22 歳の時、武州八王子（現在の東京都八王子市）の刀工であ



しもはらよしひで
る下原吉英に弟子入りして 刀 鍛冶の技を磨き、安永 3（1774）年、山形藩主・
あきもとたじまのかみつねとも
秋元但馬守永朝のお抱え刀工となりました。その翌年に作られた刀には「出
羽国赤居住宅英精鍛」という銘が刻まれています。「赤居」は古代出羽国置賜郡
にあった「赤井郷（現在の赤湯地区付近）」を表します。また、「宅英」は師匠
の一字をもらい受けた名前です。水心子は、応永（1394～1428）年間以降衰退
しつつあった刀剣を復古しようと、南北朝～室町時代初期ごろの刀を多く作り
ました。後に江戸の秋元家中屋敷に住んで「刀剣弁疑」など多くの書を著して
刀鍛冶の復古を提唱し、「新々刀（※3）の祖」と仰がれ、100 名を超す門弟を
育てました。

水心子正秀は、南陽市が生んだ偉人であり、その作風を伝える脇差は南陽市の素晴らしい宝です。

※1＝刀に刻まれた刀工の名。

※2＝署名の代わりとなる記号。

※3＝1800 年頃～1876 年の廃刀令までに作られた日本刀。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤鎮雄
平成 29 年 8 月 1 日号 市報なんよう掲載